Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ The Social Sciences in Modern Japan : The Marxian and Modernist Traditions. Berkley and Los Angeles : University of California Press., Barshay, Andrew E., (2004)
Author(s)	寺田, 晋
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 309-315
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25868
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

◇書　評◇

The Social Sciences in Modern Japan: The Marxian and Modernist Traditions. Berkley and Los Angeles: University of California Press.

Barshay, Andrew E., (2004)

寺田　晋

本書は、近代日本における社会科学の形成期から現在までの「社会科学者としての知識人たち」(i)を対象とした歴史研究である。経済学史などの個々の学問分野の史的記述はこれまでもあったが(ii)、より広く、日本の社会科学という視点から、戦前戦後の知的潮流を英語圏の読者に紹介した著作としては、おそらく本書が最初のものであり、その点にまず大きな意義があるといえるだろう。ただし、本書全体の評価としては、二つの問題点を指摘することが出来るように思われる。それについては最後に触れたい。著者のアンドリュー・バーシェイはカリフォルニア大学バークレー校の歴史学部教授であり、日本研究センター所長を務めている。著書としては、*State and Intellectual in Imperial Japan: The Public Man in Crisis.* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988) があり、これは既に『南原繁と長谷川如是閑—国家と知識人・丸山眞男の二人の師—』(ミネルヴァ書房、1995) として翻訳されているほか、2004年6月25日に東京女子大学で行われた第6回丸山眞男文庫記念講演会における講演が翻訳、紹介されている(「社会科学史の観点からみた丸山眞男」『思想』964号)。なお、この講演は本書の内容を簡潔にまとめたものになっている。著者自身による本書の手短な要約を知りたい方は、こちらを参照されると良いだろう。

本書の構成は、第1章と結論部が総論に、第2章が近代日本社会科学史の概説にあてられており、それ以外の第3章から7章までが事例研究となっている。これらの章では、日本における社会科学の、いくつかの主要な傾向を代表する知識人として、戦前の講座派マル

クス主義から山田盛太郎（第3章）、戦後のマルクス主義経済学から宇野弘蔵（第4章）、宇野学派から大内力、馬場宏二、玉野井芳郎（第5章）、市民社会派として内田義彦と平田清明（第6章）、そして近代主義者として丸山眞男（第7章）が取り上げられている。表題にあるとおり、これらの諸傾向の中でも特に焦点が当てられているのは、著者が近代日本における社会科学の二大潮流とみなす、マルクス主義と近代主義である。ただし著者は、戦前の講座派マルクス主義によって提示された分析が、その後の日本の社会科学の方向性を大きく決定付けたものとみなしているため、講座派から事例研究が始められているだけでなく、その後の社会科学者についての記述も講座派やマルクス主義全般との対決という視点が軸となっている。こうした構成は、マルクス主義が当時の知識人にもたらした影響の大きさという点では、妥当なものといえるが、マルクス主義の流行以前に関しては、第2章の概説において触れられているだけであり、その時期の社会科学の掘り起こしに研究の余地が残されているといえるだろう。

さて日本における社会科学を研究対象とした書物としては、一見すると非常に奇妙なことに、本書はトルストイの小説『アンナ・カレーニナ』のなかの、ある登場人物への言及から始められている。その人物とはトルストイによってロシアの典型的インテリゲンツィアとして描かれている人物、セルゲイ・コズヌイシェフである。彼は都市に生活する進歩的知識人であり、休暇の際に弟リョービンの農村を訪れれば、すすんで農民と話をし、彼らを「愛しかつ理解している」と語るような人物である。こうした態度は、農村が自らの生活の場であり、自らを民衆の一人として自認するリョービンの目を通すことで、欺瞞として描き出されている。コズヌイシェフにとって農村は、あくまで余暇のための場に過ぎない。彼は自分の好まない階級の人間との対比において農民を愛し、また普通の人間とは異なる存在として農民を理解しているのだ。

ところで、日本の社会科学者を扱う本書にとって、このコズヌイシェフが意味を持っているのは、彼の行動が、ある特定の社会における社会科学者の行動パターンの一つを示しているからだ。ある特定の社会とは、著者が「発展的疎外」（developmental alienation）という概念によって理解しようとする社会である。発展的疎外とは、具体的には、ドイツ、ロシア、日本という、環大西洋の列強による植民地化を免れた後発の帝国に共有された条件であり、これらの地域では「遅れ、後進性、〝伝統〟の突出といったことが、歴史的＝文化的な自己イメージの逃れられない特徴となった」(iii)、とされる。そして「この疎外が発展的であったというのは、環大西洋において、既に発展の主要なモデルが達成されており、他者はそれを求めて努力しなければならなかったからであり、また、発展が疎外されていたというのは、それぞれの〝モデル国〟が同時に脅威でもあり、物質的違いや欠如を、見下した態度や軽蔑、相互的な恐怖の対象として存在していることを、絶えず思い起こさせるものであったからだ」(iv)。著者は、一般的にそれぞれの国における社会科学は、その国が辿った近代化の過程に大きく条件付けられると仮定した上で、

ドイツ、ロシア、日本では、この発展的疎外が社会科学の主要な条件の一つであった、と主張する[9]。これが本書を貫く主要なテーゼである。それでは、この発展的疎外は社会科学者の行動において、どのように現れるのだろうか。物語の終盤において、コズヌイシェフが6年間の労苦をつぎ込んで完成した著作は、学界に学問上の革命を、世間に熱烈な興奮の渦を巻き起こすという彼の期待に反して、読書界から全くといって良いほど無視される。そして、その結果生じた空虚感を、彼はスラブ問題（四千万のスラブ民族の解放）に打ち込むことによって解消しようとするのである。このエピソードに現れているような、汎スラブ主義へ向かうネイティヴィズム、民衆に対する罪悪感の反動として生じるポピュリズム、そして、その後のロシア知識人の革命的マルクス主義への傾倒、といった傾向こそ、発展的疎外下の知識人の行動パターンの一つとして著者がみなすものなのである。

このように日本の社会科学の歴史を、地球規模での不均衡という視点から、国民国家の領域を超えて、広範な地域に共有された経験として記述する試みは、著者自身が発展的疎外の一つの帰結とみなす、日本に「永遠の特殊性」(perennial particularity)[10]を見出そうとする傾向を避けるための苦心の結果であると同時に、地域研究の新しいあり方の一つとしても評価できるだろう。ただ、発展的疎外という主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外を経験したとみなす他の地域との比較研究が欠かせないが、本書では、それが十分になされているとはいい難い。

さて、それでは発展的疎外を軸として理解される近代日本の社会科学の特徴とはどのようなものなのか。知識人に否定的なトルストイとは異なり、筆者は社会を変革しようとする社会科学者の役割に期待を寄せる。実際には、一人の社会科学者が社会の現実の作用を「暴露しようとする意志が……社会を変革しようとする集合的意志へと変化する」[11]ことがあるのであって、筆者によれば、そのような現象が、ある時期の日本の社会科学において起こったのである。以下、著者の語る近代日本社会科学史を要約してみよう。

著者は日本の社会科学史を叙述するにあたって5つの契機(moment)を導入している。それは1）新伝統主義(neotraditionalism)、2）自由主義、3）マルクス主義、4）近代主義、5）文化主義(culturalism)、の5つである。それぞれの契機は、1）1890年代前後、2）大正期、3）1920年代後半、4）終戦直後から60年安保まで、5）60年安保以降、現在に至るまで、を主要な時期として想定しているが、単なる時期区分とはされていない。そこには、個々の契機が特定の時期における単なる流行ではなく、その構成要素が発展的疎外下の社会科学の主要な特徴とみなせること、さらに、それらが特定の時期を越えて互いに影響しあっていること、を指摘しようとする意図があるのだろう。

1　新伝統主義

新伝統主義は、制度としての社会科学の成立期までに形作られた

イデオロギーをさしている。それは、広く共有された後進性の意識の下で国家主導の近代化を推し進めるイデオロギーであり、近代化によって生じる混乱を抑制するための新たな伝統の創造である。つまり、後進性の意識の下で、発展の障害となるとみなされた封建的「伝統」が排除される一方で、国家統合のために役立つとされる「伝統」が選択され、創造されていったのである。その中心をなすのが「家族国家」観である。新伝統主義は、資本主義の発達が農村からの搾取によって遂行される状況において、あたかも国家が「一つの大きな村共同体」(18)であるかのように装うことで、生じかねない対立を覆い隠す役割を果たしたのである。新伝統主義が支えた国家主導の近代化は、政治学では、自由民権運動に見られたような自然法思想から、ドイツ国家学 Staatslehre の選択的受容へ、経済学では、明治初期の福澤諭吉や田口卯吉に見られたような古典的自由主義から、ドイツ歴史学派の選択的受容へ、社会学では Gemeinshaft、つまり共同体の規範の重視といった形で社会科学を規定するようになる。これらは最終的には国家学会（1887）、国家経済会（1890）、社会政策学会（1909）等の設立によって制度的に確立されるのである。一方、著者は、こうした国家と資本主義による農村の慣習の破壊や、家族国家観にみられるような農村の「家」の象徴的価値の収奪に対する批判者として、また同時に土着的なものの本質化を推し進めた人物として、柳田国男と彼の民俗学を位置づけている。

2　自由主義

新伝統主義が生み出したタブー―天皇制、家、労働問題―に対して、「社会科学がネーション―天皇、国家、人民―に対して責務があることを認めつつ、しかしその責務を達成するための受容可能な手段の幅を広げようとする手段、ないし戦略」(19)をとったのが自由主義であり、これは美濃部達吉と吉野作造によって代表させられている。しかし、自由主義は、所与の制度にすでに理想が内在しているものと捉え、必要なのは、その理想の完全な実現であるとしたために、制度そのものの変革よりも個人的な理想主義へ向かう傾向が強かった。さらに、その後の深刻な不況の景況を受けた政治の激化のために自由主義は周辺へと追いやられていくことになる。

3　マルクス主義

こうしたなか、日本社会における対立を、はじめて分析したのがマルクス主義であり、それゆえマルクス主義は「日本における社会思想の、それ以降のすべての歴史を条件付けることとなった」(20)。著者は、山田盛太郎の『日本資本主義分析』を戦前のマルクス主義の到達点として評価する一方で、文化やイデオロギーが社会統合において果たす役割を無視したことの弊害を指摘する。山田は日本の農村の半封建的性格を指摘するのだが、そうした農村からの搾取を

覆い隠す新伝統主義のイデオロギーを見出すことが出来ない。こうした意味で山田は、発展的疎外がもたらす後進性の意識に無自覚であっただけでなく、封建遺制によって特徴付けられた日本の資本主義の特殊性を強調することで、後進性の意識を強めてしまったのである。こうしたマルクス主義の共同体のイデオロギーに対する無自覚さからくる問題性は、政治運動が弾圧され危機に陥った際に、「階級」を「民族」に置き換えることで共同体への回帰をもたらした（戦時中の三木清）だけでなく、戦後には有沢広巳の計画経済に関する仕事において顕著に見られるように、官僚的思想との奇妙な交錯をも、もたらしたのである。

一方、著者は、こうした日本の資本主義の特殊性の主張という講座派の問題を乗り越えたものとして宇野弘蔵の理論を評価する。宇野は、日本の資本主義を「実在する規範からの単なる逸脱や、永続する文化の現われとしてではなく」(23)、そうした「特殊」な形態の前提となっている、後発の発展国に一般的な決定要因を見出そうとした。さらにその決定要因を、彼の発展に関する段階論に位置づけることで、日本の資本主義を資本主義一般の発展原理において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において、重商主義、自由主義、帝国主義という三つの段階しか認めない限り、宇野理論は、それが最も受け入れられた50年代において—それは、つまり世界経済がまだ定義されていない新たな段階に入ったと思われた時だったのだが—すでに時代遅れになっていたのである。

4　近代主義

講座派においても宇野学派においても、排除されていたのは、文化、主体性、エートスといった視点だった。こうした視点を取り入れることで、講座派による日本社会分析を乗り越え、新伝統主義のイデオロギーを明るみに出したのが近代主義である。著者は丸山に対して与えられてきた様々な批判を検討している。典型的な批判は、丸山がヨーロッパ近代を理想視しているというものである。これに対して筆者は、丸山自身が、自分はヨーロッパの思想に多くを負っているが、それはヨーロッパの思想が人類共通の遺産だからなのであって、他の文化に普遍的価値を認めないのではないとした発言を引いてきている。筆者は、ヨーロッパ中心主義よりも、特に戦時中の丸山が封建制や資本主義、近代性といった範疇を実体視する傾向があったことの方が問題であろうとしている。さらに近年の山之内靖らによる批判に関しては、「日本におけるナショナリズム」(1951)のなかの、「ナショナリズムの合理化と比例してデモクラシーの非合理化が行われねばならぬ」という一文に依拠することで、山之内が指摘するような、ナショナリズムの合理化を目指した国民国家の思想家としての丸山という側面を認めつつも、「デモクラシーの非合理化」という命題と切り離して丸山を理解してはならないと反論する。しかし、肝心の「デモクラシーの非合理化」が何を意味するのかは曖昧である。いずれにせよ、丸山についても発展的疎外とい

う文脈における知識人一般の問題の一つとして考えなければならないというのが著者の立場である。丸山に代表される近代主義が、55年体制と「共犯関係」にあったとするような近年の批判を著者は受け入れていないが、近代主義が、高度成長のもたらした大規模な社会変容を乗り越えることが出来なかったことは認めている。近代主義は近代化論という成長主義（growthism）に取って代わられてしまったのである。

5　文化主義

高度経済成長がもたらした大きな変化は農村問題を消滅させ、発展的疎外という、日本の社会科学に統一を与えていた主要な条件の一つを掘り崩すことになった。後進性の意識はナルシシズムへと反転し、江戸時代に日本の高度成長の原因を探ろうとする試みや、柳田国男の影響から日本の「土着」の文化を再評価しようとする文化主義が台頭する。著者は中根千枝と村上泰亮に言及しているが、詳しく検討してはいない。これらは著者によれば発展的疎外という問題を「解決」してはいないのであって、「扱っている対象の分析というよりもその兆候である」(ii)と手厳しい。著者は現在の社会科学の特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギー的混乱に陥っているとしている。

最後に、本書の評価として二つの問題を指摘しておこう。一つは、本書が丸山眞男と石田雄による研究に大きく依拠しているために、近年の、例えばポスト・コロニアリズムといった視点からの研究成果が反映されていないことである。二つ目は、本書が「知識人」を対象としたことで、社会科学史としては扱われなかった分野も多く、不十分なものになってしまったことである。当然、何らかの視点の限定は必要だが、知識人を対象としてしまえば、個人としては有名でなくとも社会的には大きな機能を果たす官僚のような社会集団については、せいぜいネガとしてしか扱えなくなってしまう。総力戦によって形成された戦後日本の社会システムと近代主義が共犯関係にあったというような批判は荒唐無稽なものであると思われるが、そうした批判に対して本書が有効な批判を提出できていないことの原因の一つは、こうした視点の欠如にあると思われる。とはいえ、このような形で非西洋世界における社会科学の歴史のコンパクトな紹介がなされることは、比較研究の促進に貢献し、新たな視点からの社会科学の見直しに貢献することだろう。

注

(i) p.1

(ii) 例えば経済学に関してはMorris-Suzuki, Tessa, 1989 *A history of Japanese economic thought*. London: Routledge. など

(iii) p.28

(iv) p.241

(v) p.x

(vi) p.241

（vii）p.6
（viii）p.75
（ix）p.47
（x）p.54
（xi）p.174
（xii）p.251